

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370789

研究課題名(和文) 日本近世の定期市と在方の商人集団に関する研究

研究課題名(英文) A Study of Fairs and Merchant Groups in Villages in Early Modern Japan

研究代表者

多和田 雅保 (TAWADA, Masayasu)

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：10528392

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：現在の長野県北部には江戸時代多くの小都市がみられ、市場が開かれていた。この科
研では、市場における具体的な商品売買のあり方と江戸時代を通じたその変化、農村に数多く存在した商人
の具体的な活動形態と彼らによって形成されていた集団の内部構造、彼らと市場との関係及び彼ら相互の関
係、山間地帯から薪をもたらす人々や沿岸部(現在の新潟県)から塩や肴をもたらす人々の具体的な姿、以上
について歴史資料情報の収集を行い、解明することができた。あわせて資料にみられる「市場衰微」という語が
従来言われたように定期市の常設店舗化ではなく、市場外部における商人どうしの取引であることを確定するこ
とができた。

研究成果の概要(英文)：In the Edo period in what is currently the northern part of Nagano
prefecture, there were many small cities, where markets were held. In this scientific research, I
collected information from historical materials and was able to clarify: (1) the specific ways in
which goods were traded in the markets and how they changed through the Edo period; (2) the specific
forms of activities of the many merchants who lived in farming villages, and the internal structure
of the groups they formed; (3) their relationships with the markets, and their mutual
relationships; (4) concrete images of the people who brought firewood from mountain areas and those
who brought salt and fish from coastal areas (present Niigata prefecture). In conjunction, I was
able to confirm that the word "market decline" found in the materials referred not to a move toward
permanent stores in the fairs as was said previously, but to transactions between merchants outside
the markets.

研究分野：日本近世史

キーワード：日本近世史 地方史 流通史 在方市 商人 信濃国

1. 研究開始当初の背景

六斎市などの定期市は日本列島各地において、近世を通じてみられるありふれた存在であった。しかし、一般的なイメージでは、例えば「市場には固定店舗（常見世）が増大し、次第に定期市から店舗商業に展開した」（『小布施町史』）など、商業の発達によって定期市は近世を通じて衰微するものとしてとらえられがちである。この傾向は自治体史の叙述において顕著であった。

しかし実のところ、日本各地の自治体史などで紹介されている史料をみると、近世後期であっても市日を定めた定期市の存在を確認することはきわめて容易である。研究史上でもすでに原直史『日本近世の地域と流通』（山川出版社、1996年）や杉森玲子『近世日本の商人と都市社会』（東京大学出版会、2006年）などによって、むしろ常設の間屋と市との密接な関連を問うべきことが提起されていたといえる。とはいえ個別の市に基づいた検討という点では依然として事例の蓄積が少なく、固有のフィールドに根差した本格的な研究が求められていた。

一方、市に来る商人の側としては、吉田伸之『身分的周縁と社会=文化構造』（部落問題研究所、2003年）が、全国各地の在地社会に香具師（やし）集団が分厚く展開したことに注目し、彼らを香具のみならず地方におけるさまざまな商品流通の重要な担い手として位置づけた。この見解は大変注目されるが、吉田の場合でも、特定の具体的な場を対象とした香具師=商人集団と市との関係にかんする本格的な検討はなされておらず、市の内部構造との関連も不明のままであった。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、信濃国高井郡小布施村（現長野県上高井郡小布施町）の在方市（以下、小布施市）を対象として、穀物や薪、魚などといった商品を扱う複数の商人集団が、小布施市周辺の広域の農村地帯に分厚く存在したことに注目しつつ、彼らの存在形態を具体的に明らかにするとともに、市場の内外におけるさまざまな売買の諸形態について、市場の社会=空間構造とあわせて解明しようとするものである。さらにこの作業を通じて、近世の在地社会における在方市の存在意義と役割、およびその展開過程を明らかにすることを目標とする。

(2) 『小布施町史』でも指摘されているように、近世を通じて小布施市に付随する店舗空間（「宿」）の内部で売買活動が常設化していたことは確かだと考えられる。とはいえ他方では近世後期においても、小布施周辺の在地社会には、香具師に加え、穀商人、木綿商人、薪商人、魚商人などが広く散在し、これらがそれぞれ複数の村々にまたがっていくつもの小集団を形成しており、彼らが市日に小布施などの市を巡って売買を行っていた

ことは、これまで自治体史などで公表されている史料だけでも散見される。以上の両面の兼ね合いを探ることが重要なのである。そこで本計画では、小布施をとりまく一帯に展開した、さまざまな商品にかんする商人集団の史料を可能な限り収集し、それぞれの集団の内部構造や活動形態などについて明らかにする。また、さまざまな商人集団どうしの相克あるいは交流の側面についても検討を行う。

(3) (2)と連動させるかたちで、小布施を対象に、道路を挟んで立ち並ぶ常設の「宿」や「宿」内部の「内見世」、「宿」前の路上に市日に設置された「前見世」、道路中央に設置された「中見世」など、市における具体的な場にそくして、宿主、他所から到来する商人集団のメンバー、一般の百姓などの活動形態を検討する。そのうえで、市町における売買構造が、18世紀から19世紀にかけてどのように変化したかを考察する。その際、とりわけ市場といういわば外部に開かれた空間において彼らがどのような所有関係を取り結んだかという点に注目する。市場外部の商人集団が、特定の市における売買の秩序維持にどのように関わっていたのであろうかという問題は、他所を事例としたこれまでの研究でも関心がもたれており、重要な課題ではあるが未解決のままである。本計画では小布施の事例をもとに、この点についても論点の提示を試みる。

3. 研究の方法

(1) 小布施市を利用した商人集団は、穀物・木綿・薪・魚など商品ごとに分かれていたことが、『長野県史』などで一部公開されていた史料から明らかとなっている。それらの史料の所在は小布施にあるものもあれば、商人集団の本拠地であった周辺農村やあるいは越後高田（現新潟県上越市）に残されているものもある。また、特定の種類を超えた多様な商品を売買していた業種として、小布施近郊の高井郡の村々に、数百人規模からなる香具師仲間が存在していたことが、宮地正人『幕末維新期の文化と情報』（名著刊行会、1994年）や前述した吉田伸之の研究から明らかにされている。本研究計画では小布施における史料調査と併せて、これらの商人集団にかんする資料について、公表されていないものも含めた網羅的な所在調査を試みる。まず、中野市歴史民俗博物館・高山村教育委員会・長野県立歴史館に赴き、香具や薪・穀物・木綿などを扱った商人集団にかんする史料の所在調査および収集を行う。続いて新潟県立文書館および上越市公文書センターに赴き、魚商人と塩商人にかんする史料の所在調査および収集を行う。さらに、近隣の在方市に関する史料収集も行う。すなわち信濃国北部地方には、小布施のほかに、善光寺（門前町）、松代・須坂・飯山（以上城下町）、中野（幕

領代官所陣屋所在地)などで市が開かれていたが、それぞれの市は固有性を持つとともに、商人の往来を通じて近似的な性格も持ったと予想される。本年度はとくに、史料の豊富な小布施を中心にこれらの市についても事例を集積する。

(2)収集した史料をもとに、上記の商人集団の内部構造と活動形態、彼らを含んだ多様な人びとが集まった小布施市における売買構造について研究を行う。続いて魚および塩商人が結成した集団の内部構造および活動形態を分析し、彼らを含んだ多様な人びとが集まった小布施市における売買構造について研究を行う。さらに以上の考察をもとに、小布施市を中心とした北信地方の市場の特質について考察を行う。

(3)研究代表者はこれまでに、小布施町域において膨大な量の近世商業関係史料の調査を行い、目録作成や写真撮影などを行ってきたが、このうち目録については、予算などの都合上、デジタル入力がほとんど進んでいなかった。本研究計画では、史料の検索を簡便ならしめるため、既に作成を終えた史料目録についてデジタル入力を進める。

(4)小布施市にかんする史料のうち、これまでに調査を終えたものについては、そのほとんどが活字化されていない。そこで本研究計画では、当該分野の今後の研究発展に寄与するため、これらの史料について翻字作業を進め、史料紹介を行うようにする。

4. 研究成果

(1)18世紀前半期を通じた小布施市における商人宿の勢力の伸長及びそれに影響を受けた路上から商人宿の店舗内部への売場の移動の具体的な姿について、確定することができた。在方市におけるこうした変化は一見局所的なものではあるが、周辺の農山村や遠方の都市、漁村も含めた広域レベルでの社会変容の実相を探るうえで決定的な意味を持つ。また、17~19世紀といった近世全体を通じた変化をみるためにも不可欠な視点である。

(2)(1)で獲得した視座に基づき、小布施市に商品をもたらす側の地域における歴史資料の調査・収集を進めた。とくに新潟県上越市公文書センター及び新潟県立文書館において、小布施を含む北信地方に塩と魚をもたらした高田城下町の問屋商人、越後の浜方における漁民、及び上信国境を越えて移動する運輸業者らの実相を伝える資料が豊富に残されていることを見出し、これを収集した。また、小布施に薪をもたらした山間村の様相を探るため、長野県上高井郡高山村役場を訪問し、村民と山との関わりを示す近世史料が大量に残されていることを確認し、これらを多く収集した。

(3)小布施市の定期市とは別に、小布施村に近接する中野村(幕領中野代官所の陣屋元村)における定期市とそれをとりまく商人集団の動向について検討を加え、実態を解明することができた。中野村の定期市自体の様相を詳細に伝える歴史資料の残存量は必ずしも多いとはいえなかったが、(1)(2)の研究成果に基づくことによって、中野の検討を本格的に進めることが可能となったのである。具体的には中野村をとりまく商人集団の動向を記した文久3年(1863)「中野組商人名前帳」の写真版が長野県立歴史館に所蔵されていることを確認し、同データに基づいて、彼らが実質上町場化を遂げている中野村の内部と周辺の40以上の農村にわたって1400人以上の集団を形成していたこと、その集団が中野の有力商人を中心に複雑な階梯構造を持っていたこと、彼らは史料上は「香具師」として一括されているものの、実際の業態は古着屋、荒物屋、菓子屋などさまざまな品目を取り扱う商業であったことを明らかにした。あわせて彼らの存在意義は中野村において定期市が開催されていることと密接な関連を持つこと、町方の市場と周辺数十か村の商人集団という組み合わせは小布施、善光寺、須坂、飯山など信濃国北部に散在する小都市ごとにみられたと考えられること、以上について解明した。

(4)そのうえで、近世後期の歴史資料に頻出する「市場衰微」という言葉が、従来言われたように定期市の常設店舗化を意味するのではなく、定期市が常設店舗化してもそこは「市場」と呼ばれること、「市場」外のエリアで「市場」を介しない売買が行われることを「市場衰微」と称することについても明らかにすることができた。

(5)小布施町小山洋史家文書をはじめとする複数家の歴史資料について、資料情報の翻字および目録のデジタル入力を進めるとともに、これらの民間所蔵資料が将来にわたって十全に継承されるための保全措置を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

多和田 雅保、十八世紀前半期における町の展開 信州小布施、都市史研究、査読有、2号、2巻、24-45、高井地方史研究会50周年記念シンポジウム、

〔学会発表〕(計1件)

多和田 雅保、北信濃の商品流通における中野村の位置、2016年10月16日、中野市中央公民館

〔図書〕(計1件)

多和田 雅保他、北信口ーカル、幕領中野
陣屋の支配機構と民政治、2017年、49 - 61

6. 研究組織

(1) 研究代表者

多和田 雅保 (TAWADA, Masayasu)

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号： 10528392